２０２４年1月１６日（火）

老球の細道７６９号

知的好奇心と行動力

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

雑誌『文藝春秋オピニオン・２０２４年の論点１００』の中の「スポーツ」編で、バスケットボールに関する著書もあるジャーナリスト生島淳氏が「圧倒的な個の力が日本代表を世界の頂点に導く」という論文を掲載していた。

昨年、特にバスケットボール男子、バレーボール男子、ラグビー男子などが外国人コーチによって世界レベルに近づいて来た。今後世界一を狙うとなると、圧倒的な「個の力」が必要になってくる。トム・ホーバス・ヘッドコーチは「NBA でもバンバン点を取れるようなメンタリテイーを持っている日本人が出ないと」という。

さらにこの論文の中で、「圧倒的な個の力」を持つ日本人アスリートとして３人の名前を挙げている。サッカーのプレミアリーグ、ブライトンで活躍している三苫薫、メジャーリーグの大谷翔平、そして陸上女子やり投げの北口榛花選手である。特に女子やり投げで、昨夏の世界選手権で金メダルを獲得した北口選手については多くのスペースが割かれていた。（この種目で日本人が五輪、世界選手権で頂点に立つのは史上初)。

【北口は日大在学時、やり投げの先進国であるチェコに興味を持ち、コーチにメールを書いて入門を志願。チェコに本拠地を置いたことで変わったのは、言葉の力だったという。「チェコの陸上用語には、日本語にはない表現があります。語彙が豊富です」。つまり、日本語だけでは習得できない技術が、他の言語で得られるのだ。その意味で、北口は知的好奇心と行動力で圧倒的な個の力を獲得した】

また、北口選手については、朝日新聞でも今年注目アスリートとして掲載していた。国際大会から帰国後、メデイアの取材や紅白歌合戦の審査員などに引っ張りだこだった。こんなに忙しい日々は経験したことがないと思いきや、そうではなかった。

【小学生時代にもっと凄まじい忙しさを経験していたという。「習い事から習い事のはしご」の生活。水泳にバドミントン、英会話、ピアノ教室、体操教室、学習塾・・・。平日は夕方から夜まで予定がびっしり、土日は大会。放課後に友達と遊んだ記憶はほとんどない。でも、苦に感じたことは一度もなかった。「のめりこむタイプで、何より負けず嫌いだった」。

忙しくとも、充実した幼少期。自らの経験を踏まえて子どもたちにアドバイス。「失敗は許される。色々なことにチャレンジして、たくさんの経験を積んで欲しい」】

高校進学を控えて中学生選手たちの進路先が何かと話題に上がっている。今はないと思うが、昔よく耳にしたのは「勉強ダメなのでバスケがんばります」。高校でさらに高いレベルのバスケットをするには、学力、知的好奇心は必須である。さらに、学生の基本である「勉強する」ことから逃げていては、上達の原点である「チャレンジ」は何から学ぶのか？

トップアスリートに共通するのは、言い古された言葉であるが「文武両道」「文武不岐」。飽くなき向上心を持ち、受験日まで粘りに粘ってほしい。終わりよければすべてよし。